

NYレコーディング凱旋記念：10008字インタビュー キャプテンストライダム

●なんでも昨年の9月末（※1）にアメリカに行ってきたらしいですね。

永友：そうですね。約3週間行ってきました。23日間。
●キャプスト（※2）としては初となる海外レコーディング…ニューヨークのブルックリンでレコーディングしたらしいですが、何故そういう話に？

永友：本当に寝耳に水みたいな話なんです。ある日事務所までミーティングしてる時、数から棒（※3）に「Steve Jordan（※4）がキャプストに興味を持っているけど」と言われて…。

●逆指名されたわけですね。
永友：そうそう、逆指名。ちょうど彼の中ではプロデュース業に力を入れたいという意欲があったらしいんです。特に日本のバンドに興味を持っていたみたいで、色んなCDがSteve Jordanに送られていたらしいんですけど、その中から何故か僕らが、

●事務所パワーが炸裂したんですか？（※5）

永友：いや、ウチの事務所所属するだけじゃなくて、他にも沢山送ってたらいいのでそういう訳じゃないみたいですよ。それが6月末来演だったんです。

●それで、すぐにやることを決めたんですか？

永友：まず「Steve Jordanが興味を持ってると、やる気はあるか？」と訊かれたんです。ていうかそもそもSteve Jordanって、僕が世界でいちばん好きなドラマーなんです。

●菊住守代司よりよ？

永友：菊住守代司………よりも（笑）。

一同：（笑）。

永友：「（笑）」って必ず付けといて下さいね。今の所は「（笑）」が付いてると付いて無いのじゃ、えらい違いですから（※6）。

●はい、わかりました（笑）。

永友：06年の暮りにThe Verbs（※7）の来日公演をみんなで観に行ったんですけど、そこで初めてSteve Jordanのプレイを生で観てすごく感動した。その人と一緒に仕事をしたいというところがすごくイメージ出来なかったんです。

●言ってみれば雲の上の存在というのか？

永友：だけど“結果的にどうなってるかわからないからやってみよう”ってことになって、曲を作ったりして、そのウチに週末の日取りとかが決まっていたんですけど、やっぱり実感が湧かないんですよ。「同姓同名の別人なんじゃないか？」とか（笑）。

●行ってみてどうでした？

永友：着いた日の夜に初めてSteve Jordanと会って、翌日からレコーディングっていう流れだったんです。

菊住：僕の中でもドラム界ランキング1位ですか

2007年3月、3rdアルバム『BAN BAN BAN』リリース&渋谷公会堂でのワンマンを経て、各地でその名を轟かせたキテレツ系骨太ロックバンド・キャプテンストライダムが、世界一のドラマー/プロデューサー・Steve Jordanのエキスを吸って更なる深化を成し遂げた！「なにかを吐き出したかった」という想いを携えて鳴らされるシングル『わがままチャック』には、3人が放つロック汁が溢れ出している。浴びろ！みんなで汁を浴びるのだ！

ね。何を言われるかわからなくて、結構ビビってたんです。

永友：「お前はそれでドラムを叩いているつもりなのか？」とか。

梅田：「さあ、そろそろドラムを叩いてもらおうか」とか。

●そんなこと言われたら凹みますね（笑）。

菊住：Steve Jordanのドラムプロデュースは“こんな風にやったらどうだ”って目の前で叩いてくれるらしいという前情報をチラッと聞いてて、逆にそういう前情報も微妙にプレッシャーになっちゃって（笑）。

梅田：無理な超絶プレイとか要求されたらね（笑）。

菊住：楽しみでもありましたけど…楽しみ7割くらいでビビり3割でした。

永友：3人ともガチガチだったんですけどSteveは（※8）、会ってすぐに「君たちはヘッドホンは好きか？」みたいな感じで訊かれて。

●ヘッドホンが好き？

永友：要するにレコーディングの時、ヘッドホンをして演奏するのは好きか？ということをお訊かされたんです。それで「出来れば普段のスタジオとかでも、ライブで演ってるみたいに生で聴きたいですよ」って言ったら「じゃあ明日からのレコーディングはヘッドホン無しだ」と言うんですよ。

●そういう感じなんですか。それは意外ですよ。

永友：「君たちは自分がいちばん気持ちよく演奏をすることだけに集中すればいいし、我々はそれをいい音で録るのが仕事だから。何も心配ないぞ」と言ってくれて。

●すごくいい人ですね（※9）。

永友：そうですね。初日で「いいものが出来るに違いない」という感じがありましたね。

菊住：よかったですねえ。

●レコーディングで新たな発見はありました？

永友：Steveは“プロデューサーとバンド”というより、もっと同じ目線で音楽を作っていくというか。“仲間”っていう感じがあって新鮮でした。

梅田：1曲を通してずっと同じグルーブでノリを出し続けるという考え方は新しくなりました。「やってることはロックであってフュージョンじゃないんだから、とにかく曲通してのグルーブ感に全てを込めろ」とか「頭で考えるより、本当にその音楽に耳を傾ければ自然と演奏するべきことが見つかる」と言われたんです。彼の場合、そういうのをブースに入ってきて一緒に探していくんです。普通のプロデューサーとかだったらそんなこと無いのに。

●「普通のプロデューサー」って（※10）。

一同：（笑）。

梅田：一般的なプロデューサーはね（笑）。Steveはブースに積極的に入って来て、一緒に踊ったとか、マラカス振ったりとか、そういうのを大事にしてる。どの曲もグルーブのツボっていうものがあるって、それを発見すればおのずと見えてくるんだって。今回はそういうことが大事だった気がします。

菊住：目の前で実際に叩いてくれるんですよ。「わがままチャック」のバンドインしてからのビートも、最初ももうちょっと難しいパターンだったんです。キックのパターンがもう少し複雑で。それを結果的にはシンプルなものにして、「音楽に耳を傾ければ…」ってSteveは言うんだけど、それがバツと出てくるのがすごく面白くて。それに至るまでの蓄積があるって自然とそれが出てくるっていうのかな。

●なるほど。

菊住：それに、やっぱりSteveが目の前でドラムを叩いてくれるから“世界一のグルーブはこれか！”みたいな。世界一を見れるっていうのが衝撃的でした。

●“このグルーブって、こんなになれるんだ！”とか、いろんなことでも痛感させてもらったというか、僕のスティックを使って、同じセッティングで叩いて、こんないい音が出るんだってびっくりしたし、シンバルとかこんなにしっかり鳴らすんだとか。そういうプレイ面の影響もありましたね。

●ドラマーはいろんな部分で参考になるでしょうね。

菊住：あとは、さっき梅田さんも言ってましたけど、1曲をひとつのグルーブでやり続けるっていうことですね。「わがままチャック」とかもそうなんですけど、「サビでドーンといくみたいな展開への抑揚を出した方がいいのか？」って訊いたら「No!」って。いきなり顔がマジになって「No!!」です。

永友：やっぱり英語っていいなって思いました。

永友：そうですね、はっきりしてるともね（※11）。

●深く価値観を変えることが出来たという。

菊住：そうですね。プレイ面でも、ちゃんと細かくやることと大雑把にやることとのバランスがとれてるといいます。僕は全てを細かくやろうとしがちなんですけど、細かくやるべきところと粗くやるべきではないところがあるんですよ。もちろん最終的な目標は“いいデイクを録る、いい曲を作る”というところで、すべてがそこに向かってるというか。そういうのって、頭ではわかっててもなかなか難しいんですよ。その辺のバランスの取り方がSteveは素晴らしいなと。

●永友くんはどうでしたか？

永友：全体の調和としてのハーモニーが大事だと思ってました。

●ヴォーカルのハーモニーとかそういう話ではなくて、バンドとしてのハーモニーということ？

永友：そうですね。繊細に細かく見ることも必要なんですけど、俯瞰で見ることがすごく大事で。ピッチが合ったりリズムが綺麗に揃ってるモノを寄せ集めたいという音楽になるのかと言うと、そうではなかったりするんです。「わがままチャック」とか特にそうですね。ひとつの流れがあって、その流れに乗って演奏して、歌も流れに乗ってっていうのが大事で。それがハーモニーなんです。

●バンドの一体感というか、音楽の一体感。

永友：ちょっと練習しながらアイデアを出してる時に、段々ノリが揃って来たみたいな感じに「Let's Go!」みたいな感じで。試して使ったスネアとか機材が響きっぱなしになって、それが共鳴してザーザー鳴ってたりするんですよ。でも、ちゃんと正しい形でグルーブが流れてることを大事にするんですよ（※12）。

●もともとキャプストはそういう感覚を持っていると思っただけで、改めて大切に気が付いたんです。

永友：全体で1個の形になってることが大事という視点を教わって、レコーディングで入り込んでいくと、細かいところに注意がいっちゃうんですよ。

でも、今の僕たちがやるべきことはそういうことじゃないんだ。荒削りでロックを叩いてバンドをいかに楽しめよう、ちゃんと美しい形をしている、そういうものを目指すのが大事なんだなって。

●ということは、もちろん技術的なこともたくさん学んだけど、考え方や姿勢が大切なんじゃないか？

永友：そうですね。目的があって手段があるんだってことなんです。『わがままチャック』だったから、腰に乗れるグルーブの曲にするために、今自分が持っている武器をどう使うかを考える。目的があった手段があるっていう視点を教わった。

●3rdアルバム『BAN BAN BAN』（2007/3/7リリース）の時は、レコーディングに入る前にリハーサルをやりましたという話でしたが、今回はどうだったんですか？

永友：今回は日本で作ってる時からやり方を変えてたんです。そもそもアルバム『BAN BAN BAN』を出して渋谷（※13）のワンマンライブ『BIG BAN』（2007/3/18）が終わって、その後のツアーが終わった時、次になにをやるかっていうことが考えられなかったんです。1年がかりで渋谷が目標だったんです。

●燃え尽きた？

永友：まあ燃え尽きたんでしょ（※14）。それまでと同じやり方で曲を書いてリハーサルとかしてみたんですけど、全然納得いかなくてダメでした。

●“こんなことをやっててもワクワクしない”。

●並大抵の刺激では満足出来なかった？（※15）

永友：そうそう（笑）。これはもう意識的に変えていくしかないと思って、リハスタに入るのをやめよう。

●セルフおあすけプレイですね。

永友：そもそも3人で同時に楽器を鳴らすと、演奏してるだけで満足感を得られるんですよ。音圧だったり、大きな声で歌ってたりとか。でも今度は曲を作る時ももうワンステップ高い所から見て、演奏するときはあれこれ考えずに身体で演奏したいなと思ったんです。だから曲を作る時はスタジオに入らずに僕の自宅に3人集まって（※16）、パソコンとPro Tools（※17）で宅録的に始めたんです。

●そんな人たちは思ってたなかった（笑）。

永友：でしょ？（笑）それで僕がギターを録って、歌メロは「大体こんな感じ」として説明しながら「じゃあベース録ってみようか」という感じで。ドラムも打ち込みで作っていったんです。そこでとにかくワンコーラス分とかのデモを作っちゃって、しばらく時間を置いて冷静に見直してっていう繰り返し。そうやって作った曲をSteveに送ったんですよ。レコーディングしながらいろいろ探していくっていうんじゃなくて、曲を作っていく時に考えるだけ考えておきたかったんです。議論を散々重ねておく。それで演奏する時は頭を真っ白にして流れればいって、そういう進め方でした。

●今までと比べても面白い進め方ですね。

永友：そこには新たな初期衝動があるんですよ。

●どういことですか？

永友：要するに、新しいテクノロジーを導入したことに対する…。

●オタク気質だから（笑）。

永友：Pro Toolsに対する初期衝動っていうのがあ

「全然ダメでした。こんなことをやってもワクワクしない」

[L-R] Dr./Cho. 菊住守代司、Vo./G. 永友聖也、Ba./Cho. 梅田啓介



